



日記・物語文学の繁属

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 毅 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006619

日記・物語文学の繋属

藤井毅

今日普通一般に物語という種別類型は、これを更に吟味すると、多くの場合、歌物語・作り物語・日記物語・歴史物語・説話物語という様に細別して行くことが可能な様に、広い意義を持って来ているが、茲で取上げる、日記・物語文学の二つのうち、前者については、いわゆる日記文学と呼ばれている我が中古期の、我が身自らを観察・反省をした、いわば、自照の精神を支柱とした文学の作品、即ち、いわゆる自照の文学と呼称し得る文学的作品に限界し、又、物語文学についても、上記の物語なる語彙の含む概念規定のうち、作り物語——我が中古の初期に誕生して、発達成長はしたものの、中世の鎌倉期になると、次第に衰亡への道を辿ってしまった、そのいわゆる作り物語——の意味において、その繋属をば、些か發生史的に取扱ってみたいと思ふのである。

我が中古においては、現在、「作り物語」と呼称されているものが、単一にすべて物語の名で呼ばわれていた様であり、世に物語の祖おやであると言われている関係から、竹取の物語（竹採の物語ともいわれ、かぐや姫物語ともいわれた）の名が、それに随伴して引合に出されることが多いのであるが、例えば、源氏物語の絵会の巻に於いても、

「（上略）今は心にくき有識どもにて心々に争ふ口つきどもをかしときこしめして、まづ物語のいできはじめのおやなる竹取の翁にうつほの俊蔭を合せて争ふ。」

又、同蓬生の巻には、

「（上略）ふるめきたるみづしあげて、からもり、はこやのとぢ、かぐやひめの物語の絵にかきたるぞ、ときどきのまさぐりものにしたもふ。」（註からもり、はこやといふ何れも古きものがたりの名なり。（河海抄））

とものせられている等はそのあかしでもあり、又、これ等を裏付する——他の資料的な立場から、作り物語のみを物語と称呼して、他からは区別したのである。——例証としては、かの枕草子の「物語」はの章段を、提示することが出来ると思ふのである。即ち、

「物語は、住吉。うつぼ。殿うつり。月まつ女。かたのの少将。梅壺の少将。人め。国ゆづり。むもれ木。道心すすむる。松が枝。こまのの物語は、ふるきかはほりさがし出でて、もていにしがをかしき也。」

と書かれているのがそれを示すものである。

そして、つまり今日いう歌物語の範疇に入れるべき、伊勢物語とか大和物語などの歌は全くその埒外に置かれていることが判然とする

が、これは当時において、物語という場合は主に「作り物語のことを意味して、日記とか、家の集などは勿論のこと、又、伊勢物語、大和物語的な歌物語の作品までも、それらが幾らかでも、過去の歴史的な事象に関わりを持ったものと判断され得る場合においては、違った種別様式のものとして、はじめがつけられていたのではないかと想定されることである。

それが時代が降るにつれて、説話の文学とか、歴史の物語とかまでが、同じ様に物語という名称をもって呼ばれるようになり、延いては、世間で普通に戦記物と言っている部(種)類のものまでも、物語の名称が附せられるようになって来たのであるし、更には又、和泉式部日記とか、或いは平中日記などの形式のものにまでも、物語という、いわゆる呼び名がつけられてゆくなど、漸次に「物語」の意味し、その及ぶ限界が拡大されて、不知不識の間に「物語」という言葉は、可成りに幅広い意義を持つようになったものと解されることである。

それは、一方において、これ等の部(種)類の作品の間に、「作り物語」的な共通な形質があると同時に、また他方において、「作り物語」が在来からの「作り」即ち、「創作」の有する内容や資質に変化が出来はじめてきたためにも依るもので、極めて自然的に発生をした呼称として認めることも許されてよいかと思うのである。殊に、この際のように、「日記」と「物語」との連繫に焦点を置いて思考しようとする場合に於いては、此等の命名、呼称の由来経過の究明は、結局のところ、上記の二つの様式を省察する一つの要諦になるのである。物語が全盛であった平安朝の中期における、源氏物語や枕草子の中に占めるように、「物語」と称して、相当に判つきりと、「作り物語」のみをことさらに意味していると認められる点は、他方において、広狭両意義の示す物語相互間の形質や性格の相違を認めての上の

ことと受取らなければならぬと思うのである。

それでこの際、我が中古期の日記文学を対象として考える場合には、既述のような相似性に関心を持ちつつも、物語は平安朝において、ただ単に「物語」とのみ言って了解された、いわゆる「作り物語」なるものに重点をおいたものに規制されなければ、否、しなければならぬと思うのである。

偕、今茲で発生とその時期、並に展開の頃から言っても、左程著しい差違もないとも言える日記・物語両文学の繫属であるが、厳密な意味においては、両様式の作品相互間の影響とか関係とかを、具象的に、而も明確にして、夫々の結合の状態などにまでも及ぶべきであるが、平安時代の日記・物語文学の場合において、そこまで追及して行くことは、実際の問題としては或いは可成り困難と考えられる節々もあると思うが、然し今は、日記文学の一般と、物語文学一般との二つの様式における相違点や類似の箇所などに、先ずその足掛りともいふべきものを求めて、些かなりとも、相互が箇々夫々に如何様に拮抗し、感觸し、或は融合したりして行ったかの足跡を辿り、究明を試みたいと思うのである。

次に此の際、日記文学の発生や由来などについて回顧を試み少しく触れることにするが、普通一般に、草仮名文で書かれた最初の純国文の日記は、「男もすといふ日記といふものを女もしてみむとてするなり」の冒頭の章句を持つ、紀貫之(八五三)の土佐日記と考えられて居り、——厳密に言えば、それ以前に女子の仮名の日記が、全く存在しなかつたわけではないのである。註(1)——今はその流布説に従い論を進めることにしたいと思うのである。

抑々日記という語は、源を重要な案件を日次的に記録して、政治やその他の参考資料とした、唐の官庁にあった公事日記から出て、漢書

の伝来と共に我が国に流入し、襲用するようになったもので、宮廷・官庁にも日次記というものがあり、それが公の日記と私人の日記即ち私の日記との二つに区別がなされていたのである。それ等はすべて元々政治上の必要から書かれたものであったが、各個人の生活についても日記の必要が生ずる生活についても日記の必要が生ずるのにつれて、私記とか私の日記という種類のものが出る様になり、日常の生活において、後日のための備忘乃至参考記録として考えられる様になったのである。が、然しそれ等の記載は元々漢字による漢文体の表記であったのであるが、時に茲で特に注意を喚ぶことは、偶々草仮名の成立と仮名文の使用発達ということが物語文学の場合と同様に日記文学の發生の遠因（有力な原因）をなしていることである。草仮名—真仮名の草化—の生成は、単純ではないが、歌文の一字一音式になったことが將來したものであって、一字一音式は音訓の交用体の文章と比較した時に、冗長なものになることが、おのずからに書記することの煩瑣さを知覚させ、後にはこれを早書とか粗書とかの方向に導いて行ったものと想像されるのであって、次に又一面、仮名文の使用された社会が、専ら漢文を取扱う学問の世界からは概して教養度が一段と低いと思われ勝ちの人達でもあったがために、公とか、表向の所用にではなかったことにも、仮名の草化が妨害されなかったし、又、和歌が早くも漢文から遊離して、字形が正楷の文字に調和をとる必要のなくなつたことも、文字の草化を促進して行った一つの要因といえるのであり、兎に角に平安時代に入ると、学者は漢文を作り、国文の様式に真仮名を交えた交用体（寛命体）が歌謡にも、また散文にも引続き行われ出したのであるし、それが平安奠都（七九四）の後、僅かに八十年間程で、奈良朝の人には到底予知すべくもなかった新しい文字で綴られた文章（草仮名文）が既に生成されていたことは、真に驚嘆すべきことであつたし、又、奈良朝の末から平安朝に亘つて漢文学が隆

盛であつたがために、国文学である和歌が衰頹の状態となり、このことが和歌をして益々学問的にいへば、より低劣な階層に埋もれさせるに到つたことで、従つてその表記も自然と平明簡易なものに向う傾きが強く、その結果は平易な仮名文が蔭にひそんで作成せられたものが、当時の漢文学の立場から見れば、学問的にはより低いと見做されていた仮名文であり、仮名歌でもあつたし、又この両者の提携をしたものが仮名日記であり、仮名物語であつたわけで、而もその期間に字形が草化をなし遂げ、また何時の間にか優美な新しい国字になつて行ったことも注意されなければならぬことであつたのである。殊に一般には学問にも携われなかつた女子に書習われたこと、漢字や漢語を多く使用し得ない人達にとつては、此の上もない利器とされて、盛んに日記とか物語とかを書くことが出来たのであつたし、而も又、それ等の人達は漢字漢文の煩瑣さからも解放されて純国語の基盤としての文章を書くことが出来たわけで、そこに生れたものは表現としては、純粹の国語文であり、——この文は全く漢文から絶縁して、新たに国語から出発した真の国文体であつて、言うまでもなく言文一致体であつたのである——この文では、新しい文字である草仮名が主として使用され、偶々漢字が這入るとしても、それは飽迄も從位にあつて、數の上からいっても極めて少いものであつたのである。その上に草仮名は文字自体が曲線的に優美に見える文字であつたがために、女流の情緒的な文学作品の表現にとつては、此の上もなく似つかわしいものであつたわけで——それに交わる漢字までが、主位にある仮名に阿ねて調和をするという自然の傾向として正楷に書かれて、後代江戶期にまでも平仮名を交えた文章の漢字の表記（表現）が真書きにされない起源をもなしたのである——この仮名の文章は漢文が公的な男子の通用文であるのに対しての女文（をんなぶみ）とも名付けられるに至つて、調子も柔軟で而も用言による説明などの出し方にも精細緻密なも

のを出し易からしめていた便利なものであったのである。既に奈良朝以前から、真仮名の使用が始められ、次第に一字一音が用いられ、略体化も進められて草仮名の成立となったのであり、而も、この草仮名は先ず歌謡には用いられる必然性は既にあったが、それが最も多く和歌に使用され、和歌殊にその詞書から仮名文を生ずるに到ったこと、いうならば、平安時代の社会で仮名文字は唐突に発明されたものではなく、又、散文の発生したことも、この和歌の形態には充分に盛り切り得ない文学的の領域なるものが、現実の社会の発展に随伴して顕現せられたことを示唆するものであるにしても、このことが発生の時期を近く、若くは同じくする物語や日記の文学の二つを生むに到ることに連関するのであって、少くとも草仮名の成立は、確かに日記の文学を誕生させた一つの要因をなしているのである。

以上の様な社会情勢―雰囲気―環境の中に在りながら土佐日記が誕生したことについて考えると、次のことが言えるのではないかと思うのである。つまり流布説の様に、土佐日記は当時に於いてする男子間の、漢文漢字を駆使しての準公的記録として用いられていた日記に対し、女子の而も仮名の国文による私事の記録をば文芸作品の新種として産出させたこの執筆の意図、それには少くとも以下のことが思い合わされるのである。實之は当時猶、男子の漢文や真仮名による表現が全支配的であったのに対する草仮名に依存をした仮名文の世界の建設と開拓とを自論みつつもあった当時の男子文化人中の第一人者として、最も進歩的な有力者と自他共に許した彼實之が、而も既に三十年以前(延喜五(九〇五))に勅撰和歌集という堂々とした公的な存在、古今和歌集の真名の序―古今倭歌集序―に拮抗する仮名の序―古今和歌集序―を仮名文字を使用して、仮名文の持つ表現効果の価値を遺憾なく宣揚した老練家としての豊かな経験と、大きな自信との上に立って土佐日記の執筆

をしていること、更には、文体も古今和歌集仮名の序のような華麗なものとは全く趣を異にした、軽妙平淡なものでありながら、既に当時の世は真仮名とか草仮名による我が純国文が愈々大衆的なものとしての発達をして来ていたが、その線に同調を示すのみならず、その効用に拍車をすらかけたものであったことなどが注目されなければならぬことであり、そして当時に於ける男性がものした準公的記録として行われていた漢文様式の日記に対して、本来の日記の第一義的な記録性―日記には備忘のための記録が主要な目的であり、出来事の事実をありのままに精確に記すことが、基本的なあるべき姿・性格であるが、その正しい記録性―に背反し、既に逸脱したいわば、純正日記とは異性質な而も女性の仮名の国文による体裁を具える私事の記録としての土佐日記は、その内容からも判る様に、實之自身の抱負と述懐とによって全篇が構成され、自己本位のいわば一見しては主観的な作品としての表現が強く採られていることである。これは明かに貫之によって試みられた一つの新しい文学様式ともいわれ得べきものであったわけ、この土佐日記冒頭の章句、「をとこもすといふ日記といふものを、をんなもしてこころみむとするなり。」の意味を吟味するならば、その解釈には、「男の人も書く日記というものを女の私も負けず書いてみようと思うて筆を執るのである。」との通説の他に、「女もして試みん」を、「女もじして試みん」ではないかの説を採り上げれば女文字にて書く解釈されるのであるし、更に「又、若しそうではなくとも女の用いる仮名で書くという意に解する説も必しも捨てられないのではなからうか」の説も成り立つわけであるが、それ等の何れを採るにしても共通して言い得ることは、この章句の総体としての趣旨主張によって、この日記が自己の備忘のためという域を全く脱した他見、即ち読者を想定してもせられたものであること、その上にこの日記には全体に亘り第三者的の表白を敢行していることは先ず目を

惹く事柄である。

これは日記の正則な表記方式とは程遠いというべく、仮りに一步を譲るにしても、日記としては実録性を保有し、その上に自己を訴えることにおいてこそ意義が保ち得られるのであるが、三人称で書かれた日記ということになれば、そこにはありのままの自己を露呈せずして自己客観化の理性を働かせる傾向が強いことが判るのであり、——この傾向は、一人称体の自己表現法をとると、人間共通の羞恥性が作用して、しどけなくなり易いので、それをおそれ、或はこれを警戒することによって、一面文章の品位とか奥ゆかしさを保って、今日という芸術的な効果を増強するものと思考したためかとの推察も許されるわけで、この三人称体表記によって一面旧い歌人的な風格を偲ばせてもいるが、又他の一面において、当時の支配的であつたいわゆる官僚的な教養の形式から解放された真に率直で而も客観的な観察と描写とをしていることである。このことは我が国における批評文学作品の始祖ともいふべき古今和歌集の仮名の序を書いている彼、貫之の作家的精神には、その第三者としての立場、傍観者としての物を見る態度が覗われ、既に暎と萌生えていたのであるし、これはまた、物語作者をはじめとする作品の構成や、創作活動における中軸・本質・基本的な態度・心構えをなす揺がぬものであるが、それに全く合致していたということである。この客観的描写をするということは、殊に物語の手法とは共に相似し相通するものであり、その根底には自由な知性的なものが介在していたのである。而も、この知性的なものとは平安時代の文学上の一要素となっていたものであつて、特に土佐日記にはそれが顕著に露われて来ており、この客観性は一見したところでは主観とも見える場合が多いのであるが、自照性として、また自己批判性というべきものに推移して、後々に続く日記文学の系列分野にも、展開といふべきか兎に角表明されて行くことになるのであるが、この事柄を今少

し具象的に解明するならば、それ等を齎す素地が全篇に漂う積極的な作為的の構成の配置や和歌に対する批判、或は諧謔に富んだ記述の局所々々にも見出され、今更にこの日記をば、只に漢文の日録という実記から、日記文学という純文芸にまで築き上げているの感じを強くするのであり、猶この日記の中には、斯様な文芸的な性質を更に高次な創作的な文学にまで結成させたものとしての創作(虚構)性というべきものが判つきり窺えることで、作者貫之が作品を通してその読者に向つて提唱し、且つ告白したかったものは種々に考えられるであろうが、例えば、仮名文字による倭歌や国文の表現偉力の発揚ということも、その重なるもの一つとして挙げられ得るが、就中その最たるものとしては、京に生れ任地の土佐において急に亡くした女兒への追憶——果てしなき人の子の親として、父として又、母としての愛惜と切なる慕情とを、永遠に形のある標として、亡き愛児の形見として残し留め、且つ訴え、人の世の共感を希求することに執筆のモチフのあつたことが緊々と感得せられるのであり、冒頭に女性への仮託を予め告げて展開させる虚構的な態勢に続いて随所に自己の分身を据えて述懐する場を設けているのである。——殊に十二月二十七日の、「みやこへと」の和歌、二月九日の、「なかりしも」の和歌、末尾二月十六日の、「うまれしも帰らぬものを」の和歌、の夫々を中心とする箇所は、夫々にその山をなすものである。——斯様に周到な行届いた配慮の下に作品に、起伏をつけていることは、この日記に自照的傾向を強化すると同時に、情緒の豊潤な一面を賦与することになったと考えられ得るのである。又、前者の和歌や仮名の国文発揚の信念は土佐日記を一貫して常に漢文や(漢)詩に対決を迫りながら余儀なくも続けられたものであつたのであり、おのずから日々の実記という限界を超越した特殊の文芸的構成を生み出すに到つたものと想定し得るのである。

そしていま挙げたこの特殊な創作性乃至虚構性といったものは、正

態な日記文学の性格とか、構成要素という点において如何様な必要乃至重要度を占めるべきものかを慎重した時に、これ等の性質はいわば正規主流の日記文学の性格ではなくて、副次支流的というよりは寧ろ、それとは常態として対蹠的な相反する別系分野の中心的存在の文学性創作性といえると思うのであって、この異った範疇に入るべきこの性格は物語文学の中枢支柱をなす文学性の一つであるとするならば、土佐日記は外来的な漢文の日記に飽足らずこれに拮抗して国粹的な純国文の日記をものしようと期成したのであるが、成行としてそれは文芸性の立場から言えば、本質的なものの中に物語文学的な主流要素を包容しながら、異色のある新体様式の文芸を生誕させたことにもなるのであり、而もこの土佐日記がはつきりと日記文学として確認されている限り、我が日記文学は漢文日記に基いた日次の形態とそれと実記という本質とを維持し、その創作乃至表出構成の技法を物語文学から導入することによって新体の日記文学として誕生したものであると思うのである。既に少し触れたところであるが、土佐日記の記載については、外面からいえば叙事的というよりは情趣的な傾向が強く、記録的というよりは述懐的な傾向が強いし、また一見は客観的にも見えるが主観的に走っていて、内面からは、首尾の照応とか対照法的に全篇を一貫する配置や組立、或いは日並の記事の機能的な連繋など可成り意識的な構想の跡が顕著であり、自然風物についての觀賞とか、人情の機微に対する感懐や、或いは和歌についての批評、それに伴う古歌や故事に及ぶ連想その他等の表現にも繁く筆が運ばれているが、それ等は何れも先蹤の日記が保つ姿態というものに飽足らず、寧ろ日記自体に背倚する作家なる紀貫之の創案にかかる新たな試み―漢文日記に対しての国文日記のあるべき、又、あらまほしい姿を実作を以て明かにしたことにもなるのであり、土佐日記に後続し展開の途上を辿った平安朝の日記の文学は、斯様にその発生当初から物語文学

の主體的な身分的な構成要素をもその必須なる分子として数えることに決定づける、その萌芽を植付けたと見るべきであると思うのである。

我が仮名文日記の形式と精神とを誕生させた紀貫之の意欲はその後の男性によって必ずしもその悉くが継承されたとはいえないまでも、土佐日記は我が日記文学の創始であると同時に、後代から見れば日記文学の二つの系統分野の一つである旅日記(紀行様式)文学の祖をなすという二重の意味合に於いても注目をせらるべきであり、猶且二系統の他の一つとしての、日常の生活を記した自照と自己告白の日記の文学として、物語の性格をより緊密な、いわば表裏的な連繋を打出すまでに到った本格的な日記の文学が形成し出現されたのは蓋し蜻蛉日記においてであるので、次にそれ等と物語との繫属についての究明を試みたいと思うことである。

土佐日記(九三四―五)から蜻蛉日記(九四四―五)の出現までには、「いほぬし」(九四六年)熊野遠江の紀行二篇からなる和歌の詞書の体形をした僧増基の(紀行日記)と高光日記(九六一―二)一名多武峯少将物語、高光が一首を(注)残し多武峯に出家遁世したまでの行跡の記録)の出現の過程を通るわけであるが、茲で注意のせらるべきは、高光日記は多武峯少将物語ともいわれている歌物語的な性格を主とした日記でありながら、日記の人名は第三人称の表現を襲用し、地の文の間に和歌・消息文を混入して心惹く魅力的な風致のある表現をしていて、日録の意義を軽く取扱い、日付にこだわらず疎にし、中心的な事柄に絞り上げて精細な描写をするという日記の物語化(小説化)という範示をしていることは史的展開(姿貌)上この短篇の持つ特色であって、この方式は後の日記文学殊に和泉式部日記の纏め方などにも、大きな示唆を与えていることである。又この日記が上述の如くに一名物語の名称を持っていることについては、特にこの日記だけに限ったことではなく、和泉式部

日記その他についても言えることであるが、仮名文の発生期における和歌の詞書というものは可成り重要な位置を占めるものであり、而も草仮名の使用される範囲は和歌から詞書、更に消息文の方向へと進展をしたものであり、その詞書が物語作成の意識の下で、題名と筋とによつてその和歌の前後に伸長拡大する時には、歌物語が誕生をし、告白的なものと、自照・現実批判との意識を持って拡大する場合には日記が生れるというのが常套であつて、その意味合から平安時代前期の歌集と物語と日記との三つは、歌反古・打開・詠藻・歌合・消息の類が母体であり、而もこれを整理したり、或いは統一したりする時に臨む態度の状況、即ち、重点を物語構想の面に置くか、あるいは、現実批判の面に置くかによつて、前者の場合には物語となり、後者の時には日記・紀行となるのであつて、この時期の家集と物語と日記の三者は、その母体整理に臨む態度や意識の如何によつて夫々に規定されるのである。従つて、この三つはそれだけに密接であり、混同もされ易く、区別が明確には出来難いという事実があり、例えば、和泉式部日記が和泉式部物語と呼ばれ、逆に伊勢物語が在五中将日記などの二つの名称で呼ばれるという場合があるのなどは、それに該当するのである。この高光日記が、また、多武峯少将物語と呼ばれるのも物語の性格を多分に有しているためからのことである。

斯くして、道綱の母に作られた蜻蛉日記の出現を見たのであるが、これは初瀬と石山詣との道の記が、日記の一部に含まれている上に、また、第三者的に書こうと先行の土佐日記の態度を継承はしているが、明らかに自叙伝風の日記として土佐日記と共に、既に書いた我が日記文学の二つの系統―旅日記と日常生活とを記した日記―後者としての祖をなすの意味で、また、心境の描写の精緻な点において大きく評価されるべき作品であるが、その冒頭の一節、

かくありし時すぎて世の中にと物はかなく、とにもかくにもつ

かで世にふる人ありけり。かたちとても人にも似ず心魂もあるにもあらであるもことわりとおもひつつ、ただ臥し起き明かし暮らすまに、世の中におほかた古物語のはしなどを見れば、よに多かるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上まで書き日記して、珍らしきさまにもありなむ、天下の人の品たかきやと問はむためしにもせよかしと覚ゆるも、過ぎにし年月ごるのこともおぼつかかりければさてもありぬべきことなむ多かりける。

右はこの日記の成立の過程や在り方を考える上に重要な課題を示して居り、殊に在来の物語に対し新しい容相の文学樹立の宣言とも解せられる文でもあるわけである。「世におほかるふるものがたりのはし」とか「世におほかるそらごと」等という言葉の調子から量ると、作者は個々の具体的な作品を考えずに、天曆(九四七)年間、世の尚好を集めた作者の周辺にも能く見られたそらごとのふるものがたりは作り物語一般の意味であり、その作り物語に対して作者は、「めづらしきさまにもありなん」と記し、自負と確信によつて書かれた新容相の文学は「人にもあらぬ身の上まで書き日記して」とまで言及してゐるのであるから、その「そらごとのふるものがたり」は作者自らの「身の上」ではなくて、飽迄も非現実的な伝奇的傾向の強い架空なものを意味しているのであり、然様な世間一般の物語を「そらごと」と判断して虚構で信憑性のないものとして殊更にこれを避けようとするらしいのである。

在来のふる物語の虚構性に対する不満欲求が作者をして新様式文学の作成を思立たせて、散文の新しい分野を開く要因を築かせたものであり、作者の心には最初から日記文芸の創始的な工夫があったというよりも先ず従来の古物語に飽き足らぬ批判めいたものが滞積してゐて、それが徐々に作者に働きかけ、遂には別箇の新天地と新様式文学の製作に立向させたものと思ふのである。蜻蛉日記が一面、土佐日記以

下の先蹤日記の後を継ぎながら、又一面、日記文学を唯単に女流作家のものにしたに止らず、実は我が身の上の真実の厳しい自照の文芸という形相のものにまで改造し得たということは、また然様な物語に対する拮抗や反情から、新しい文芸の分野を開拓したことに依存すると思ふのであり、これは日記文学の發生と展開とを物語との連関において思考する場合、殊に看過を許さぬ肝心な問題といふべきである。

その冒頭章句の中にある上記の「かき日記して」については未だ定説はないが、架空の伝奇物語に対し、「体験の真実を書記する」の意味に解する説に従うならば、当時の「物語る」なる語が包容するものに對したとばとして作者が選び出した連語動詞と看做すことも出来、従つて以後に書こうとする作品形体のみに名付けたことばではなく、内容に合わせ付けられたことばと見ることも可能になるわけで、上記のような見解を認めるならば、平安時代の日記文学は本格的にはその性質から蜻蛉日記によって創開されたと考えられることも出来て、日記文学は世に「そらごと」の物語がもてはやされた展開の途上、それに拮抗して創められた身上を書き日記する文学であつたことになるわけで、茲で日記文学と物語文学との連繫について言えようことは、發生展開の史的な立場から見ると、此等の二つの様式が、元々累系の發生とか、展開とかをしたものではなく、当時の社会的環境から、從來全支配的であつた和歌という類型方式に拮抗して勢力を得た、散文様式展開の一派の中の物語文学發展の流れの途中から、変貌奔流派生したものが日記文学であつたとも見ることが出来るのである。そして斯様な動因によって生まれた蜻蛉日記は、物語文学に対して反撥の姿態を保ちながらも、さりとて自らに徹底もし得ず、猶物語文学の様相の名残を留めているのであつて、先掲の文の一部、「かくありしときすぎ世の中にいと物はかなく、とにもかくにもつかで世にふる人ありけり。かたちとても……」の書始めの文句などは、明らかに我が身上を

書き日記することを希いつつも、直かに自己を表面には出さず、即ち第一人称的な自白の形を避けている、このいわゆる臚化法を採用したことなどは、真に物語文学の伝承の形式といふべきであるし、又、この日記では、己れの主情的な憤怒・懊惱などを告白することに於いて、主観的な自照とか、反顧とかいう現実に戻らせたまつた場合に、かかる第三人称の客観化した表現は動もすれば動揺を將來するものであり、然様な場合に、逆に抑々の起筆の発端である身上告白日記の眞性を窺わせるのである。斯様に物語的な虚構なるものに期待が持たず、「自らの身の上を書き日記する」という眞実の体験に反省や批判を加えた日記の形体として書くという新しい純文芸の在り方を發明した日記文学の而も始めての作品が、一面表現構成の点において必然的に物語文学の技法を取入れざるを得なかつたこと自体は、兎に角に平安朝の日記文学が物語文学と全く性質の違ふ形式に生れ得なかつた由縁を感じるわけで、又一面、蜻蛉日記の出現後、落窪・源氏物語以下の平安朝物語には日記文学の色彩技法を可成り移入して、漸次伝奇性を抑え事象を凝視し据えた感覺的な写実の形態に向う様になつたものもあり、全く日記文学との連繫なしに斯くなつたとは思えぬ事柄である。例えば、源氏物語の巻々を獨立して眺めた様な場合にはその感を強くし、幻の巻などはその最たるものとして認められ、要するに日記文学は「そらごと」の「作り物語」に拮抗して自照告白をその中核として誕生し、一方、物語文学は日記文学の様式と描写の技巧とを吸収消化することによって發展させる様になつたと考えられ、爾後は相倚り相扶ける形を採りつつ夫々に、又、綜合に發達を遂げたといふべきで、それは後に続く作品の流れに認めることが出来、日記文学では和泉式部・紫式部日記や、集積の日記文学ともいえる更級日記等にも殊に反映し、物語文学では落窪・源氏物語以下のものにもその証跡が認められ、更に枕草子にまでも大きな感化を与えていることも感ずるのである。それ

等の具体的な究明は規定紙数の関係もあり稿を改めて試みるべく、要は日記・物語文学の繋属は我が散文学史上、存外に大きい意義を持つものと思うことである。

註

(1) 土佐日記以前に、女子の假名の日記が全くなかつたわけではなく、醍醐帝の皇后穩子(五八五)の太后記―大宮日記ともいう―があつたことは次に引く諸断片が残存し、

○大宮日記云、延長六年、亭子院よりたかうなたてまつれ給へり。御使よしふかいねりの大うち給、(河海抄卷二十四 横笛)

○太后御記云、延喜(長か)七年正月十四日おとこたかあり、わたかつけの藏人四人大うへわりおはします。(同上卷十 初音)

○延長七年三月廿八日太后御記云、おとこの御賀を美頼の中將つかうまつたり、四尺の御屏風二よろひ、御てをうへにかゝせてまつらせ給、(同上卷十三 若菜上)

○太后御記承平三年八月廿七日女御もたてまつる、いぬ二にて御ものこしおととゆひたてまつり給ひぬ。(同上 若菜上)

○太后御記承平四年十二月九日、御賀、おととくまかて給ひぬ。又をくり物沈のはこ一よろひいれたり。せむだいの御てのまんようしう、今一には本五まき、やまこと一云々(同上卷十三 若菜上)

○太后記云、承平四年十二月九日御賀、みこたちかんたちめには、女のよそひ、宰相にはさくら色のほそなが。(同上 若菜上)

とあり、或いは又、他にも女流日記があつたことは、蜻蛉日記の巻末の歌集に、「其の子の日記を宮に伝ふ人に借り給へりける」とあるによつても判明するのである。

(2) 久松潜一氏所説

(3) 土佐日記考(岸本由豆流)支持

(4) 久松潜一氏所説

日記・物語文学の繋属

(5) ○二十七口、大津より浦戸をさして漕ぎいづ。かくするうちに、京に

生れたりしをんなご、くににてにはかかうせたりしかば、此の頃のいでちあいそぎを見れど、何事もいはず、京へ歸るに、をんなごのなきのみぞかなしひ恋ふる。ある人々もえたえず、この間にある人の書きて出せる歌

みやこへと思ふものかなしきはかへらぬ人のあればなりけり。

(6) ○九日(中略)かくのぼる人々のなかに、京よりくだりし時に、みな人、子どもなかりき。いたれりし國にてぞ、子うめる者どもありあへる。人みな舟のとまる所に、子をいだきつつおりのりす。これを見て昔の子の母、かなしさにたへずして、

なかりしもありつつかへる人の子をありしもなくて来るがかなしき。

といひてぞ泣きける。父もこれを開きてぞ泣きていかがあらむ。かやうのことも、歌も好むとてあるにもあらざるべし。もろこしもこも、思ふことにたへぬ時のわざとか。こよひ宇土野といふ所にとまる。

(7) ○十六日(中略)さて池めいてくぼまり、水づける所あり。ほとりに松もありき。五六年のうちに、干とせやすぎにけむ。かたへはなくなりけり。今生ひたるぞまじれる。おほかたの、みな荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひいでぬことなく、思ひこひしきかうちに、この家にてうまれしをんなごの、もろともにかへらねば、い

かがはかなしき。舟人もみな子だかりてのしる。かかろうちに、なほ悲しきにたへずして、ひそかに心しれる人々いへりける歌、うまれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るがかなしき。とぞいへる。なほあかずやあらむ、またかくなむ。

見し人の松のちとせに見ましかばとほくかなしきわかれせましや。

わすれがたく、くちをしきこと多かれど、えつくさず。とまれかう

まれ、とくやりてむ。

(8) ○かくばかりたへがたくみゆる世の中にうらやましくも澄める月かな

(9) 池田龜鑑氏所説

○春の光を見給ふにつけても、いとゞ、くれ惑ひたるやうにのみ、御心ひとつは、悲しさのあらたまるべくもあらぬに、殿には、例のやうに、人々まゝり給ひなどすれど、御心地なやましきさまに、もてなし給ひて、御簾のうちにのみおはします。……(源氏物語 幻の巻冒頭)

○二月になれば、花の木どもの、盛りなるも、まだしきも、こずゑをかしよう霞みわたれるに、かの御形見の紅梅に、うぐひすの、はなやかに鳴き出でたれば、たち出でて御覧す。……

○春、深くなりゆくままに、御前の有様、いにしへに交らぬを、めで給ふかたにはあらねど、しづ心なく、何事につけても、胸いたう思さるれば、おほかた、この世のほかのやうに、鳥の音も聞えざらん山の末、ゆかしうのみ、いとゞ、なりまさり給ふ。……

○夏の御かたより、御衣がへの装束たてまつり給ふとて、なつ衣たちかへてける今日ばかり古き思ひもすずみやはせぬ、御返り、羽ごろものうすきにかはる今日よりは空蟬の世ぞいとゞ悲しき、祭の日、いとつれづれにて、「今日は、物見るとて、人々、心地よげならんかし」とて、御社の有様など、おぼしやる。……

○五月雨は、いとゞ、ながめ暮し給ふよりほかのことなく、さうぐしきに、十余日の月、はなやかにさし出でたる雲間の、めづらしき折に、大将の君、御前にさぶらひ給ふ。……

○いと暑きころ、涼しきかたにて、ながめ給ふに、池の蓮のさかりなるを、見給ふに、「いかに多かる」など、まつ思し出でらるるに、ほれづしくて、つくづくとおはする程に、日も暮れにけり。

○七月七日も、例にかはりたる事多く、あそびなどもし給はで、つれづれに眺めくらし給ひて、星合、みる人もなし。

○朔日ごろはまぎらはしげなり。「今まで経にける月日よ」とおぼす

にも、あきれて明かし暮らし給ふ。御正目には、上下の人々、みな齎して、かの曼陀羅など、今日ぞ、供養させ給ふ。……

○九月になりて、九日、綿おほひたる菊を御覧じて「もろ共におきるし菊の朝露もひとり袂にかかる秋かな」……

○神無月にはおほかたも時雨がちなるころ、いとゞながめ給ひて、夕暮の空の気色もえもいはぬ心細さに、……

○五節などいひて、世の中、そこはかとなく今めかしげなる頃、大将殿の君たち、重殿上し給へる、ゐて、まゐり給へり。

○今年をば、かくて、しのび過ぐしつれば、「いまは」と、世を去り給ふべきほど、近くおぼし設くるに、あはれなる事、尽きせず。

○朔日のほどのこと、「常よりも殊なるべく」と、おきてさせ給ふ。親王たち・大臣の御引出物、しなぐの緑どもなど、「二なうおぼし設けて」とぞ。(末尾)

右は源氏物語における蜻蛉日記などに近い日記的表現の一例としてあげることが出来ると思うのである。